地域の明日を医療で支える
地方独立行政法人 長野県立病院機構

しろくま ニュースレター

長野県立こども病院

No.101
令和8年.3.26発行

長野県立こども病院だより第101号　発行日：令和8年3月26日　発行者：稲葉雄二
〒399-8288　長野県安曇野市豊科3100　TEL0263-73-6700　FAX0263-73-5432
https://nagano-child.jp/　kodomo-info@pref-nagano-hosp.jp

長野県立こども病院理念
わたし達は、未来を担うこども達とその家族のために、質が高く、安全な医療を行います。

撮影：大畑淳

Contents

病院機能評価受審のご報告…… 1
この人に聞く …… 2
看護師のキャリア紹介…… 4
病院内に
いわさきちひろの作品を展示 … 5
はじまりは「おいしい」から
～地域のエールが届くとき～ … 6
ようこそ!「ちるくますいぞくかんへ」… 8
当院初のセラピー犬訪問
―ハウル君が届けてくれた温かい時間―…… 9
日穀製粉株式会社様のご寄付により
院内フリーWi-Fiを設置いたしました… 10
保育士だより／栄養科通信 …… 11
私のオススメBEST5 …… 12
フィラデルフィア留学記 …… 14
こころにお届けする本／サポーターズボード … 16
View／編集後記 …… 17

病院機能評価受審のご報告

病院機能改善委員会・QCコントロールチーム　宮入 洋祐

2025年12月10日・11日の2日間、長野県立こども病院は日本病院機能評価機構による機能評価を受審しました。受審に向けては、2024年12月にキックオフミーティングを開催し、各部署において自己評価を行い、評価項目に沿ってマニュアルの確認や見直しを進めていただきました。皆様のご協力で受審は滞りなく終了し、受審後の講評においてはサーベイヤーの皆さまより概ね高い評価をいただくことができました。

今回の受審においては、これまでの当院の実績を考慮し、コンサルテーションの介入を最小限とし受審準備費用の縮小を図りました。そのため職員の皆様には受審準備において自分たちの整備したマニュアルや取り組みが、機能評価機構が要求するレベルに達しているのかどうか不安に思われた点も多かったと思いますが、講評における高評価がその答えになっていると思いました。

私自身、今回の機能評価受審における統括責任者として準備状況の確認等を行ってまいりましたが、その過程で院内ほぼすべての部署の皆さんとお話しする機会に恵まれました。どの部署においても、それぞれの役割に真摯に向き合い、責任感を持って日々の業務に取り組む姿勢が強く伝わってきました。また、診療分野を担当したサーベイヤーからは、長野県立こども病院の「人材」の素晴らしさについて高い評価をいただいております。これは、日頃から職員の皆様が患者及びそのご家族にしっかり向き合い、心のこもった医療・支援を提供している努力の賜物と思いました。

今後、中間評価、最終評価の連絡があるところですが、今回の受審を通じて得られた学びや改善点を確実に活かし、来年度以降、病院機能改善委員会・QCコントロールチームとして組織横断的により良い医療を提供できる病院づくりを進めていきたいと思います。これからも、全職員が一丸となって、安心・安全で質の高い医療の提供を目指してまいりましょう。

病院機能評価 受審時の審査風景

病院機能評価解説集表紙

第60回「この人に聞く」　副看護部長　福島 華子さん

今回は、この３月に定年を迎えられ、長年こども病院に貢献してくださった副看護部長の福島さんです。忙しい時間の中で快くインタビューに応じてくださいました。

編）早速ですが、この病院に就職された経緯を教えていただけますか？

福島）看護学生の頃から小児科に興味がありました。公衆衛生の学校で保健師と養護教諭の資格も取りましたが、まずは看護師として経験を積むのが良いと思い、小児病棟が充実していた北里大学病院に就職しました。

その後、医療短大時代の小児科教授だった武井先生が、長野県立こども病院の準備委員会に関わっていたこともあり、４年後に長野県立こども病院への就職を決めました。

編）看護師を目指したきっかけは…

福島）幼い頃から看護師に憧れていました。小学生の頃は薬剤師に興味を持ったこともありましたが、祖父母を自宅で看取った経験が大きかったと思います。往診に来てくれた先生や看護師の姿が印象的で、人の最期に寄り添う仕事に魅力を感じました。

編）看護学校に入ってから理想とのギャップはありましたか？

福島）特にギャップは感じませんでした。実習は楽しかったです。ただ、その時に病棟で点滴の薬剤量を誤って患者さんが低血糖になったという事があり、看護の責任の重さを実感しました。

編）学生時代、サークル活動も熱心にされていたそうですね。

福島）「児童文化研究会」というサークルで、児童館や保育園で人形劇やミュージカルを上演していました。泊まり込みで公演を行い、自炊などもしていました。子どもたちの笑顔が何よりの原動力でした。

サークル活動「人形劇」

編）お忙しい仕事の中でのリフレッシュ方法を教えてください。

福島）コンサートに行くのが好きで、スーパービーバーや髭男、石田組などを観に行きます。他にも、漫画を読んだりNetflixを観たり、庭の草取りをしたりする時間も大切にしています。またヨガを月に２回習っています。ヨガの先生の声がとても好きで、癒されています。

名古屋へ…

娘と…

編）こども病院での32年間を振り返って、どのように感じていますか？

福島）人生の約半分をこの病院で過ごしてきました。小児看護に携われたことは、私の中の誇りです。産休明けには仕事がつらくて転職を考えたこともありましたが、周囲の支えがあって続けてこられました。

編）子育て期は大変なことも多かったと思いますが、娘さんたちの反応はどうでしたか？

福島）特に「家にいてほしい」と言われたことはありませんが、結果的に娘たちは医療職には就きませんでした。私の姿を見て、いろいろ感じたのだと思います。主人が食事を準備してくれるなど主人の支えも大きかったです。娘たちの「おふくろの味」と言えばお父さんの味だと思います。

編）今後やってみたいことはありますか？

福島）いつまでも、看護には関わっていたいです。看護師は、ケアを提供するよりも「もらう」ことの多い仕事だと感じています。

編）福島さんが尊敬する方を教えてください。

福島）母ですね。昭和の人らしく、物事の捉え方が前向きで、見習いたいと思っています。

最後に後輩たちに贈るメッセージをお願いします。

福島）時代とともに看護も変化していますが、患者さんやご家族のために何ができるかを考える姿勢は変わらないと思います。変化の中でも、その本質を大切にしてほしいです。

福島さんありがとうございました。

続いて、福島さんから、3月で退職される山﨑紀江さんをご紹介いただきました。山﨑さんは長年こども病院で看護に尽力されました。インタビューさせていただきましたので、その内容をお届けします。

「この人に聞く」番外編

「子どもたちの笑顔が、私の原動力」

前医療安全管理者・病棟師長 現事務課長補佐　山﨑 紀江さん

3月で退職される福島副看護部長へのインタビューを行った際、「ぜひ山﨑紀江さんにも話を聞いてほしい」というお話をいただきました。そこで今回は、第60回「この人に聞く」の番外編として、山﨑紀江さんにお話を伺いました。

看護師として、医療安全管理者として、そして現在は事務部門の立場からも、常に“子ども中心”の支援を考え続けてきた山﨑さん。その歩みと、これからの思いを語っていただきました。

私が看護師を目指したきっかけは小学生の頃です。子どもと関わることが好きだったこと、そして近所のかかりつけ医で見た看護師の姿に憧れを抱いたことが始まりでした。「ああ、いいな」と感じたその思いが、看護の道への第一歩となりました。さらに祖母の介護の手伝いを経験し、「人を支える仕事がしたい」という思いが強まっていきました。

看護実習中に出会った内科の指導者との出会いが転機となりました。「小児って楽しいよ」と言われた一言が心に残り、子どもが好きだったこともあって、小児看護の道を志すようになりました。

看護学生時代の印象的なエピソードが二つあります。一つは、重度心身障がいのある子どもとの出来事です。絵本を読んだ翌日、その子の食事の介助をしていると、突然、空を指さして円を描くような仕草を始めました。何を伝えようとしているのか分からず戸惑いましたが、ふと目をやるとテレビに飛行機が映っていました。その瞬間、前日に読んだ絵本の青空を飛ぶ飛行機の場面が思い浮かびました。実は、前日、私はその患者さんと絵本の飛行機をみながら、「飛行機、空を飛ぶんだよね」と、空を指して話したやり取りがありました。「飛行機？」と尋ねると、その子は満足そうな表情を見せ、再び食事を始めました。言葉にならない感動を覚え、相手を理解することの大切さに気づいた出来事として胸に残っています。

もう一つは、末期がんの患者さんとの関わりです。最初は挨拶にも応じてもらえませんでしたが、実習の終盤、二人きりになったときにその患者さんがぽつりとつぶやきました。

「俺はこのまま終わっちゃうのかな。」

学生だった私は「そんなことないですよ」と答えました。しかし後になって、「本当は何か話をしたかったのではないか。もっと寄り添えたのではないか」と悔しさを感じました。

こうした経験から「聞き上手になりたい」という思いが生まれました。言葉にならない想いをくみ取る力を大切にしたい。それが私の看護の原点だと思います。

その後、小児看護の道を進み、国立小児病院（現 成育医療センター）を経て、長野県に新設されたこども病院へ。以来、32年間にわたり、病気や障害を持つ子どもたちと向き合ってきました。

「その子が生きている一瞬一瞬が嬉しかった。その子はその子のままでいい。その子らしく生きてほしい。」

子どもたちの個性を大切にしながら、どんな立場でも子どもを支えることができるという信念のもと、看護師や事務職といった枠にとらわれず、常に“子ども中心”の支援を心がけてきました。「この子らを世の光に」知的障害のある子どもたちの福祉や教育などに先駆的な実践をされた糸賀一雄さんの言葉です。私はこの言葉について、勝手な自分なりの捉えをしています。病気や障害やさまざまな境遇の子どもたちはいますが、すべての子どもたちひとりひとりがとても尊い存在であって、その一人一人がこの世の光であり、社会にとって大切なものなのだという解釈です。イラストはそういったコンセプトをイラストレーターの山形さんに伝え、描いてもらったものです。これからも子どもたちと共に歩んでいけたらと思っています。

今後は人生の第２ステージとして医療と福祉の現場に身を置き、いずれ迎える定年後には第３のステージとして、地域の子どもたちの居場所づくりを目指しています。

「支援って押しつけじゃない。でも、子どもたちが笑ってくれると、こちらがエネルギーをもらえるんです」。そう語る山﨑さんの言葉には、長年の経験と、変わらぬ情熱がにじんでいました。

今回、お二人のお話を聞かせていただき、胸が熱くなりました。本当にありがとうございました。そしてこれからも長野県の小児医療を支える一人としてご活躍ください。

インタビュアー：山﨑さ・南塚

看護師のキャリア紹介

第1病棟　高野 裕史

「挑戦のきっかけは、10年来の友人との出会いから」

私は2025年に看護系大学院の修士課程を修了しました。仕事を続けながらの通学だったため、夜勤明けや休日を使って授業の準備や研究に取り組む日々を過ごしました。決して楽ではありませんでしたが、一つひとつの学びが自分の糧となり、充実した時間を過ごすことができました。

実は、大学院進学を考えるようになるまでは、自分のキャリアについて深く考える余裕がなく、日々の業務に追われる毎日でした。そんな私に大きな影響を与えてくれたのが、先天性心疾患の患者会「心臓病の子どもを守る会 長野支部」と、そこに所属していた一人の男の子との出会いです。

彼とは友人として約10年間を共に過ごしました。病気と向き合いながらも、さまざまなことに挑戦し、前向きに成長していく姿に心を打たれ、「私も何かに挑戦したい」と思うようになりました。自分の進みたい道を見つめ直し、教育者・研究者としての可能性を広げるため、大学院の門を叩く決意をしました。

大学院では、専門職としての教育や倫理観、管理者としての視点を学び、文献の精読やプレゼンテーション、研究方法論の習得に励みました。特に関心のあった「先天性心疾患患者のセルフマネジメント能力を培ったプロセス」についても、明らかにすることができました。

多忙な中での学びは大変でしたが、同級生や病院スタッフの皆さまの支えがあったからこそ乗り越えることができました。この経験は、今の私の看護観やキャリアの軸を形づくる大切な土台となっています。

通った大学

病院内にいわさきちひろの作品を展示しています

安曇野ちひろ美術館

今回は、春の訪れとともに、心がふとやわらぐような作品と展覧会をご紹介します。松川村にある「安曇野ちひろ美術館」は、いわさきちひろをはじめ、世界の絵本画家の作品に出会うことができる美術館です。長野県立こども病院でも、ちひろの作品をピエゾグラフ※1にて展示しています。みなさん、院内で、見かけたことはありますか？

いわさきちひろは、1918年12月15日、雪の降る日に、福井県武生（現・越前市）で生まれました。その後、東京で育ちますが、両親がともに信州（現・松本市）出身であったことから、長い休暇のたびに信州を訪れ、自然に親しんできました。

第二次世界大戦中、東京の空襲で自宅を失ったちひろは、松本市へ疎開し、そこで終戦を迎えます。その後、両親が、開拓農民として移り住んだのが、現在美術館が建つ松川村でした。ちひろにとって信州は、多くの作品を生み出し、家族との団らんのひとときを過ごした「心のふるさと」でした。

3/1(日)から開催の展覧会「ちひろ 心のふるさと 信州」(～6/7）では、ちひろが信州で描いた絵本『花の童話集』、『万葉のうた』、『あかまんまとうげ』などの作品を、アルバムに残された写真や信州各地のスケッチとともに展示し、ちひろと信州の関わりを紹介しています。

1966年、黒姫山の山麓に広がる信濃町の黒姫高原に、ちひろはアトリエを兼ねた山荘を建てました。ちひろの好みを生かして設計されたこの山荘を、春夏は「野花亭（やかてい)」、秋冬は「雪雫亭（せっかてい)」※2と呼んでいました。四季折々の自然に出会える黒姫を、ちひろは毎年のように訪れ、絵本を制作していました。

黒姫山荘で描かれた作品のひとつに、『あかまんまとうげ』があります。その表紙の《わらびを持つ少女》には、鮮やかな若草色に包まれ、薄紫のすみれの花を髪に飾る少女の姿が描かれています。この絵本には、生命の息吹に萌える春の黒姫の情景が表現されています。黒姫の豊かな自然と、日常を離れて過ごす静かな時間が、ちひろの創作と心を支えていたことがわかります。

《わらびを持つ少女》は、現在、GCUにて展示しています。しろくま図書館には、ちひろの絵本や図録を置いていますので、院内で過ごす時間に、どうぞ手に取ってご覧ください。

今回の展覧会では、このほかにも、ちひろが信州で親しんだものや山登りの写真、松川村でのスケッチなどから、ちひろの人となりをご紹介します。機会がありましたら、足を運んでいただけたらうれしいです。

松川村・安曇野ちひろ公園にある 黒姫山荘の復元

いわさきちひろ
わらびを持つ少女　『あかまんまとうげ』（童心社）より　1972 年

春の展覧会：3/1~6/7

- ちひろ 心のふるさと 信州
- 96才、画家。ユゼフ・ヴィルコン。
  —ポーランドの画家—
- ちひろ美術館コレクション世界に生きる動物たち

安曇野ちひろ美術館

Instagram

- 10:00 ～ 17:00開館
  （GW・夏休み9:00 ～ 17:00）
- 第2・4水曜日休館（GW・夏休みは開館）
- 高校生以下・18歳以下は無料でご入館いただけます

※1 ピエゾグラフ…耐光性のある微小インクドットによる精巧な画像表現で、ちひろの繊細な水彩画を高度に再現しています。
※2「雫」に「カ」という読みはありませんが、ちひろはあえてこう呼んでいました。

はじまりは「おいしい」から～地域のエールが届くとき～

ランチテラス代表　小畠 千奈都

遠方に住む家族から届いた手作りのお弁当を食べたとき「あ、おいしい……」と感じて、涙があふれたのは、私がこどもの長期入院に付き添っていたときのことでした。当時の食事はコンビニごはんやインスタント食品ばかりで、いつの間にか食事を味わう喜びも日常の感覚も麻痺していました。けれど、あの時の手作りのお弁当のぬくもりが、私を「お母さん」である前に「わたし」としての日常感覚へと引き戻してくれました。それから10年。こどもが入院するたびに、付き添う家族の悩みもまた、こどもの成長や家族のかたちの変化とともに変わっていきました。きょうだいが生まれてからの入院生活は、特に大変でした。そうした経験を重ねる中で見えてきたのは、「付き添い入院」は決して一部の特別な人の問題ではないということでした。子育てに関わるだれもが当事者になり得る「社会課題」なのだと、感じるようになりました。もし、こどもが入院しても、こどもも家族も「いつもの暮らし」のぬくもりを感じられる支えがあったなら。それはきっと、「子育てしやすい地域」へとつながっていくのだと思いました。

その想いをかたちにするため、2024年10月、入院するこどもとその家族を応援するため、子育て仲間と共に、「ランチテラス」を立ち上げました。長野県立こども病院を拠点に、病院のご理解と、地域の飲食店18店およびボランティアの皆さまのご協力により、平日週5回、お弁当やパン、お菓子の販売支援を行っています。あわせて導入したのが、1枚200円の食事補助券「おうえんチケット」の発行です。これは「かつてこども病院にお世話になった恩返しをしたい」という地域の方々の温かな寄付によって支えられています。現在、県内30カ所以上の協力店舗に募金箱が設置され、地域からのエールが、お弁当とともに家族のもとへ届いています。

利用されたご家族からは、「毎日のお昼が楽しみになった」「気分転換になる」といった声をいただきます。たとえ一食であっても、自分のために食事を選び、ほっとひと息つける時間は、こどもを支え続ける親にとって大切な「セルフケア」のひとつです。また、地域から届く「ひとりじゃないよ」というエールは、こどもを支える家族の存在にもあたたかな光を当てます。そのぬくもりは、きっとこどもたちの「今」を照らす力にもなっていると感じています。

昨年12月には、ランチテラスコンサート2025「Relay of HOPE」を開催しました。当日は150名を超える方々にご来場いただきました。また、インスタライブ配信も行うことができ、病院やご自宅からも参加していただきました。

このコンサートは、おうえんチケットへの募金を呼びかけるとともに、入院中のこどもとその家族へ音楽や食を通

ランチテラスコンサート 2025

ちるくま音楽隊

きむら のりこさん

してエールを送るために企画しました。趣旨に賛同した地元アーティスト7組の方が有志で演奏してくださり、地域で暮らす仲間としてともに響きあう一日となりました。こども病院職員有志による「ちるくま音楽隊」の皆さんも、初めての院外演奏として応援に駆けつけてくださいました。演奏の最後には、かつてお兄さんがこども病院でお世話になったというダンサー・きむらのりこさんとのセッションが実現しました。楽曲「生命の奇跡」と、感謝を込めた「いのちの舞」。その共演に、客席には涙ぐむ方の姿も見られ、会場全体をやさしく包み込みました。また、クリスマスの衣装で会場を沸かせた同病院のPICUスタッフユニット「大森先生とゆかいな仲間たち」の皆さんは、普段は病院でこどもたちに笑顔を届けている有志活動を、この日は地域のこどもたちに披露してくださいました。日々こどもたちに伴走しているスペシャリストの皆さんならではの遊び心あふれる演奏に、温かな手拍子と笑顔が会場に溢れました。

その温かな一体感は、医療と地域のあいだにある境界がやわらかくほどけていく瞬間のようでした。地域が医療の現場で、多様なニーズを支える一つの手となること。そして医療もまた暮らしの中へとひらかれ、ともに同じ場に立ち、喜びを分かち合うこと。その姿が、そこにはありました。その光景は、こども病院が「社会から切り離された非日常の場所」ではなく、子育ての延長線上にある「暮らしの中の医療」へと歩み出していく兆しのように感じられました。

入院という環境のなかで途切れがちな、こどもと家族の「日常」を、もう一度つなぎ直すために。こども病院が目指す「ファミリー・センタード・ケア（こどもと家族中心のケア）」を、地域も手を添えながら、ともに支えていくことが大切だと考えています。

このゆるやかな「まじりあい」から生まれる景色が、いつか新しくも当たり前の未来になることを信じて。私たちは、これからも地域から応援を続けてまいります。

最後に、今回のランチテラスコンサートにご協力いただいた皆さま、病院関係者のみなさまにこころよりお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

大森先生とゆかいな仲間たち

ランチテラスコンサート 2025 スタッフ集合写真

ようこそ！「ちるくますいぞくかんへ」 Vol.6
パパのおくちで育てられる魚？ マンジュウイシモチのふしぎな子育て

こんにちは、水槽屋じゅげむの小澤です。今回は、水槽の中でもとびきりユニークな姿と習性を持つお魚、「マンジュウイシモチ」をご紹介します。

マンジュウイシモチってどんな魚？

丸くてふっくらとした体に、黄色い水玉模様と赤いお目々が特徴的なこの魚。 その体型が「おまんじゅう」に似ていることから「マンジュウイシモチ」と呼ばれています。 海外では、そのユニークな模様がパジャマの柄に見えることから「パジャマ・カージナルフィッシュ」なんて呼ばれることもあるんですよ。サンゴ礁に暮らすとてもおだやかな魚で、水槽の中でもペアで寄り添うように泳いでいる姿が見られます。

パパが卵をくわえる、ふしぎな子育て

マンジュウイシモチの一番の特徴は、オスが「口の中」で卵を守って育てる「マウスブルーディング」という習性です。 卵をくわえたお父さんは、赤ちゃんがふ化するまでの約２～３週間、なんとご飯も食べずにじっと耐えて待ちます。究極のイクメンですよね！ この病院の水槽ではまだその様子が観察されていませんが、もし口元がふっくらとふくらんだ個体がいたら、それは「育児中のパパ」かもしれません。ぜひ探してみてください。

おしどり夫婦でおだやかな性格

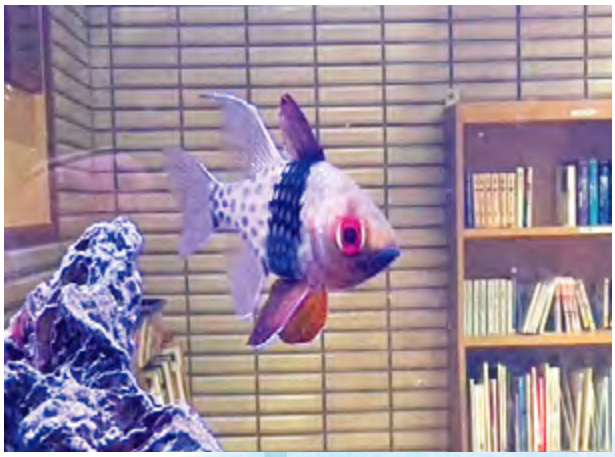
マンジュウイシモチは、オスとメスがペアで行動することが多く、仲良く並んで泳いでいる姿をよく見かけます。お互いを意識しながらそっと寄り添っている様子は、見ているこちらまでホッとする光景です。性格はとても柔和で、他の魚とケンカをすることはほとんどありません。

夜の病院を見守っているかも？

じつはこのお魚、夜行性なんです。 昼間はまるで止まっているかのように、のんびりプカプカと浮かんでいますが、暗くなると活発に動き出します。みんなが寝静まったあとの静かな病院で、元気に泳ぎ回っているかもしれませんよ。

おわりに

マンジュウイシモチは、見た目のかわいらしさと、健気な「イクメンぶり」で知られる魚です。「今日はおまんじゅうの魚、どこにいるかな？」「卵をくわえていないかな？」と、ぜひ探してみてください。何気ないしぐさの中に、魚たちのちいさなドラマがかくれているかもしれませんよ。



マンジュウイシモチ

当院初のセラピー犬訪問 ―ハウル君が届けてくれた温かい時間―

循環器小児科　沼田 隆佑

今回、長野県立こども病院では初めて、セラピー犬の訪問を受ける機会に恵まれました。社団法人「犬とのんびり」の川村様のご厚意により、集中治療室で緩和医療を受けていた“ひまりちゃん”のため、ラブラドール・レトリバーの「ハウル君」が来院してくれました。

緩和医療が進む中、ご両親は、ひまりちゃんが「ずっと犬を飼いたいと願っていたこと」や「肺移植の待機のためペットを迎えることを諦めていたこと」を静かに話してくださいました。そして、治療を懸命に続けてきたお子さんの“最後の願い”として、「どうか犬と触れ合わせてあげたい」という切なる思いが伝えられました。

このご希望は、「犬とのんびり」が掲げる理念と深く重なり、川村様に連絡を差し上げたところ、即日お返事をいただき、翌日の訪問が実現しました。

訪問当日、お父様はハウル君の姿を前に涙を流して喜ばれました。患児も人工呼吸器管理下で意識ははっきりしない状態でしたが、差し伸べた小さな手がハウル君の温もりに触れ、その匂いを感じ取っているようでした。短い時間ながら、その表情や仕草から“犬と触れ合う喜び”が確かに伝わってきました。

その後、患児はご家族に見守られながら静かに旅立ちました。しかし今回、当院として初めてセラピー犬を院内に迎え、闘病中の子どもたちにとって犬がどれほど深い癒しと安らぎをもたらすのかを、私たちは身をもって実感しました。それは患児だけでなく、ご家族や私たち医療者の心もそっとほぐしてくれる、温かく尊い時間でもありました。

全国では、闘病中の子どもたちや痛みを伴う処置を受ける子どもたちに寄り添いながら活動する「ファシリティドッグ」の必要性が広がっています。数字では表しきれない“癒しの力”が、どれほど子どもたちの心を支えているのか―今回の経験は、その大切さを私たちに強く教えてくれました。

当院でも、この貴重な経験をきっかけに、いつの日かファシリティドッグを迎え入れることができればと願っています。子どもたちが少しでも安心して治療に向き合えるよう、そしてご家族が温かい時間を過ごせるよう、より良いケア環境の実現を目指して努めていきます。

当院初のセラピー犬
「ハウル君」、
PICU を訪問

ハウル君と触れ合う、
ひまりちゃんと家族の
あたたかい時間

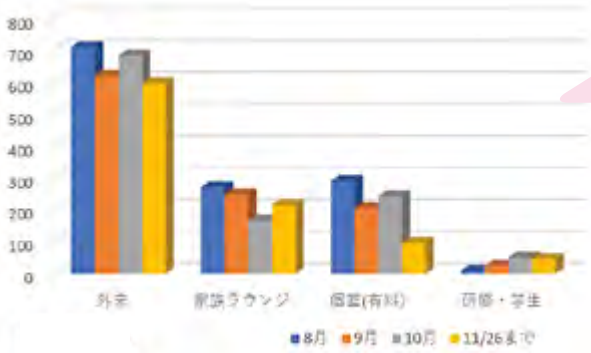
日穀製粉株式会社様のご寄付により院内フリーWi-Fiを設置いたしました

日穀製粉株式会社創業80周年記念事業の一環として、院内フリーWi-Fi設置費用の全額をご寄付いただきました。医療機器への影響がない範囲を限定し、特に付き添いされるご家族等にもご利用いただけるようWi-Fi設置場所を拡大し、2025年7月28日に設置しました。

フロア	設置エリア　（　　）：同時接続台数
1階	南外来（100）、北外来（100）、1病棟内プレイルーム（10）、家族控室（10）、しろくま図書館（10）
2階	PICU家族宿泊室（10）、家族控室（10）、PICU家族待合室（5）、手術待合室（5）、検査科前待合室（5）
3階	新生児病棟内家族控室（10）、3病棟内ラウンジ（10）
4階	北4病棟内家族ラウンジ・プレイルーム（20）

利用状況

【接続実績】



設置以降、平均月1,100件、1日40件の接続実績があります。
外来や家族ラウンジ（有料個室を除く）で多くご利用いただいています。

【年齢別】

Wi-Fi利用者の年代は、30歳～40歳代です。
外来や入院患者様の付き添いの方に主にご利用いただいています。

医療情報管理課

保育士だより　クリスマス会

12月24日はクリスマスイヴ♪夜には南棟大会議室にてクリスマス会が行われました。

NICUではクリスマスの準備として月齢が少し大きい患者さんを対象に「クリスマスツリーペインティング」「サンタさんの帽子作り」を企画しました。

指先にインクをつけて自由自在に画用紙をペタペタ、ヌリヌリ。綿のフワフワした感触を手や腕に感じながら、サンタさんのお髭に変身。カラフルで綺麗なクリスマスツリーと優しいお顔のサンタ帽子が完成しました。

クリスマス会当日は、可愛いサンタさんとトナカイさんが病棟へ遊びにきてくれました。面会に来られたご家族へプレゼントをお渡しすると写真撮影タイム。

大森先生とゆかいな仲間たちの皆さんも演奏に来てくれて、楽しい音楽と笑顔に包まれ、素敵な時間を過ごすことができました。

（室山瑞絵）

栄養科通信　「ごはんバス」

食事の時間が近づくとおなかが空いてそわそわ…病室から「もう来るかな？」「あっ来た！」なんて声が聞こえることがあります。

みんなのご飯を運んでいるのが温冷配膳車。「ごはんバス」って呼んでいる患者さんもいるとか。

温かいものは温かく、冷たいものは冷たく提供できるように庫内が区切られており、決められた温度で管理しています。そのため結構大きいサイズになり廊下やドアにぶつけないように慎重な運転を心がけています。

病棟内や廊下を通る時に患者さんやご家族、職員や業者の方など行き来する皆さんにぶつかってしまったら大変なので、声をかけさせてもらうこともありますが安全のためご協力をお願いします。

（松浦桂子）

PHC 株式会社ホームページより引用

私のオススメ BEST5

外来　市之瀬 美穂

第１病棟　竹澤実礼さんからのバトンを受け、担当させていただきます。外来の市之瀬美穂です。

私も百人一首は好きで、お正月にはこどもとかるた大会をしています。

さて、今回依頼を受けたはいいけど、おススメできるほどのことはないなぁ…、と思い、私の趣味について「よかったことベスト５」をご紹介させていただきます。

昔から布が好きで、気に入った柄があると買って何かを作るのですが、布のハギレがもったいないなと思うものの何もせず、また気に入った柄を見つけるとついつい買ってしまい、布が増えていく一方…。それではいけない、何か形にしようと始めたのがパッチワークです。

パッチワークとは様々な色や柄の小さなハギレ布を縫い合わせて大きな布地を作り出す手芸方法です。これに思いのほかはまってしまい、休みの日にはミシンを出したり、手縫いをしたりしています。パッチワークを始めて良かった事がいくつもあります。

市之瀬さんの似顔絵
by 外来スタッフＹ

1位　勉強！？《新しい柄を作る、美術、家庭科、数学》

布の思わぬ組み合わせを発見したり、新しい布との出会いがあり楽しく、ついつい布が増えてしまいます。布にも表情があり、組み合わせによって印象がまったく変わります。柄合わせはセンスも問われるのでとても悩みます。

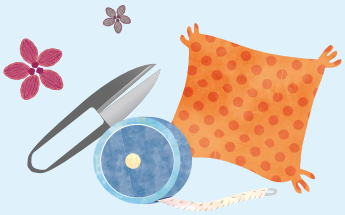
またパッチワークは実は数学なの？と思うほど計算することが多く、何年ぶりかに三角関数を使うことがあり、勉強との再会もありました。

ログキャビン

2位　家族からのリクエストが来た《クッションカバー》

私が作っているのを見て、子どもからリクエストがあり、作ると喜んでくれたのがクッションです。人のために作り、喜んでもらえる楽しさを知りました。今でも使ってくれています。

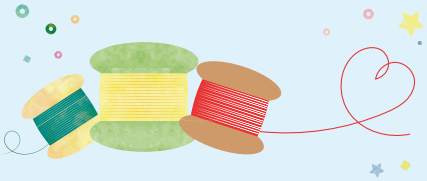
レモンスター・窓辺の鳩



3位 作ったものをプレゼント《喜んでもらえる楽しさ》

退職する仲間や、何かのお礼にちょっとしたものを作ってプレゼントすることが出来るようになりました。ポシェットやティッシュケースカバーや巾着など、今までテレビやスマホに費やして溶けてしまっていた時間で、人に喜んでもらえるものを作れることが大きな発見です。

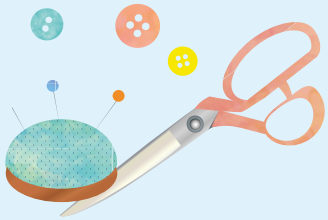
友達へのプレゼント



4位 カバンが増えた《カバン作り》

古布を使った変形するバッグ

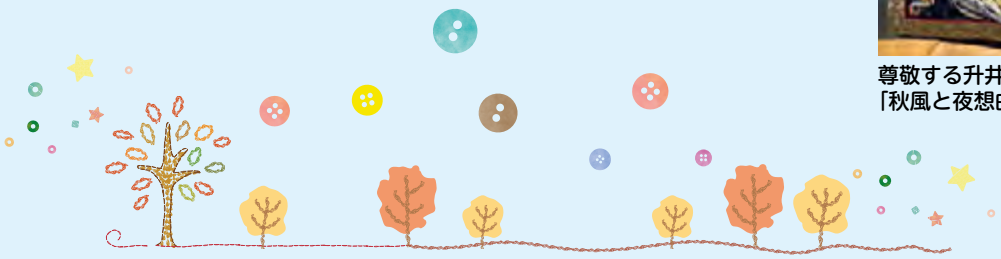
もちろんパッチワーク自体も好きですが、実はその中でもカバンを作る事が一番楽しくなり季節に合わせて作っています。自分の好みの大きさや柄、ショルダーバッグにするのか、手持ちにするのかいろいろ考えながら作るのが楽しいです。



5位 一生の趣味《パッチワーク教室での出会い》

近所のパッチワーク教室に通い始め、そこでの仲間との出会いが楽しさを倍増させました。私よりだいぶ年上のお姉さま方の生き方や、年齢に関係なく意欲的に製作する姿に、「自分もこんな年の取り方をしたいな」と感じました。さらに美味しいお漬物や果物を分けていただけるのも楽しみの一つです。

尊敬する升井紀子先生の作品
「秋風と夜想曲」



第2回

フィラデルフィア留学記

循環器小児科　沼田 隆佑

第二章　～文化の違い～

今回は、アメリカ、フィラデルフィアへの留学を通して感じた「文化の違い」に関して、体で体験したことを共有していきたいと思います。

アメリカといっても非常に大きな国であり、州によって州律が定められており、私の暮らした地域で感じたことが、須く全アメリカに当てはまることはないことはお断りさせていただきます。

まず、最初に感じた大きな違いは、“治安”でした。テレビで見ていたものとは違い、小さな子供達が自分たちで自転車に乗って外に遊びに行くという場面を見ることはありませんでした。どこに行くにも、親が車で連れていき、必ず監視をする。10代の子でも、基本はどこかの親が付き添うのが当たり前、という文化でした。子供の誘拐や傷害事件が連日報道されており、安全面での危機感が背景にありました。そのため、子供のみでの“お留守番”も禁止されており、見つかった場合は親が罰せられる可能性があります。よく映画で見る、黄色いスクールバスは必須のものであり、必ず登下校時に親がバス停まで送り迎えに行くということが当たり前でした。日本に帰国した時、小学生が自転車に乗って遊びに出掛けている姿を見て、なんて平和な国なんだと実感したことを覚えています。

スクールバス

一方で高校生になると、車の免許を取ることが許され、自分たちで車に乗って出かけることができるようになります。早い時期から自分のことは自分で責任を取るということを念頭に置かなければならず、そういった意味で自主性を鍛える教育の重要性は小さい頃からの課題となってきます。

ここで、子供の教育的な文化の違いにも触れていきます。

アメリカは小学校低学年から非常に自由な風潮が特徴的です。制服はなく、全ての授業が席に着いて行われるものではなく、時には寝そべったり、立ち上がって歩き回ったりして行われる授業がザラです。自分の長所を伸ばすという部分が根本にあるため、例えば算数が得意な子は小さいうちからアドバンスドクラスといった、早く先のことを学んで、その子のペースを乱さないよう伸ばしていく工夫がなされています。日本と違い、右に倣えという発想がなく、

小学校の教室

義務教育年度も絶対的なものではないのです。また、小さいうちから多くの文化・人種にも触れられます。定期的にそれぞれの文化に合わせた行事が開かれ、アメリカ以外の多様な考え方に小さいうちから当たり前のように接することができます。これがアメリカの多様性に繋がり、移民への許容の高さに繋がっていくのだと思います。ビーガン料理やベジタリアン料理などがどのレストランにも当たり前のように用意されているのも日本と大きく違う点です。多様な文化を受け入れる素地ができているのです。クラスにも多くの人種がおり、母国の言語と英語の２言語以上を喋ることができます。発音もそれぞれですが、それが当たり前という他を排除しづらい文化を小さいうちから形成していく様です。ただ、それだけで全ての差別がなくなるという理想的な状態には残念ながら至っていないようです。人にもよりますが、根強い黒人やヒスパニック、アジア人への偏見が感じられる場面もあります。これは、このような自由で多様な国でも永遠の課題なのでしょう。また、授業ではプレゼンテーションの機会が多く与えられており、自分の気持ちを伝え主張する、それに責任を持って行動する、という一連の流れが鍛えられる仕組みになっています。授業中は多くの子が自由に発言しにぎやかに授業が進んでい

音楽会

く様子を良く目にします。個性的な発言・行動への否定的な声や視線も日本よりも少なく感じました。まずは、褒める、比べない、という感覚が多くの人に根付いているようでした。

次に、働き方への考え方です。

アメリカでは多くの場面でストライキが行われます。労働者は上に支配されるのではなく、自分たちの権利を主張するということが当たり前です。不満のある労働環境であれば、働かないという姿勢をみせ、改善を訴えるのです。それが、社会的な構造に歪みをきたす結果になることも多くあり、電車が来ないなども日常茶飯事です。ネガティブな面もある一方、このマインドが社会を改善させていく、日常の当たり前・常識に縛られず新たな考え方やものを生み出すきっかけとなるのでしょう。一長一短ですが、長く日本に暮らす我々としても考えさせられる文化でした。何人かのアメリカ人に「何のために働いているの？」と質問をしたことがありました。日本では、多くの人が「社会に貢献するため」「人の役に立つため」「やりがい」といった答えが返ってきます。しかし、あちらでは「えっ、お金を稼ぐ以外に理由があるの？」といった答えが当たり前の様に返ってきます。そのため、常に職場の悪口を言い、少しでも早く自宅へ帰れるよう努力します。働いているのは自分のためであり、生きがいは“仕事”ではないのです。多くの場合に“家庭”“子供”“自分”といったプライベートにベクトルが向いています。そのため、子供の発表会や習い事に両親が来たり、送り迎えをしたりすることが当たり前であり、それはやらされていることではないのです。どの医者も、平日に子どもの行事のために休みます。むしろそれは当たり前のこととして仕事場で許容されているのです。父も母も心からそれに参加したい、と思っており、仕事よりも“大切なこと”が当たり前のように優先されています。日本人は仕事に真面目に向き合い、社会奉仕、人のために自分の身を粉にして働くといった考え方が根強く残っている印象を受けます。実際それは何物にも代え難い美しい理念だとは思う一方、自分や家族のことが二の次になってしまう危険性を孕んでいます。休日であっても、仕事を理由に子どもと向き合えない人も多くいるのでは無いでしょうか。多くの成功が日本人のこのマインドによって達成されてきていますが、「働き方改革」という、欧米の文化が“型”として導入された昨今では、精神的な部分の“型”も欧米に似せていくのか、日本古来のものを大事にしていくのか、という大きな問題に直面しているのではないかと感じさせられます。私としてはどちらも理解できるし、素晴らしいものだと感じています。中立的な立場から現状を共有させていただき、難しい問題と捉えるところから対応は始まるのだと思います。

最後に、じゃあアメリカ人はみんな不真面目でサボり癖があるのか。確かに、飲食店などでは対応の悪い店員が多く、役所仕事もやっつけになっている場面を多く経験します。非常に大きなカルチャーショックを受けますが、真面目では無いのか、というとそうではありません。お金を稼ぎたい人は日本人よりもずっと頑張って働いている人が沢山います。そして、アメリカの良い点として、それを評価し給料として見合ったものを与えられるのです。お金を稼ぎたければ働け、サボったら居場所はなくなる、代わりはいくらでもいる。そういった高い競争の中で生きている人たちだからこそ、時間を大事にする。という精神を我々よりも強く持っている気がします。限られた時間をどのように使うか、人生の優先度を意識しながら暮らしているのだろう、と感じます。

会議でダラダラ自分の興味のあることを沢山話している人は日本人に多くいると思います。周りは上司だからなかなか文句も言えず、日が暮れるまで会議が続くということもざらにあることでしょう。あちらはそのような事への許容が狭く、皆が集まるということは、皆の貴重な時間を使っている・奪っている、という意識がものすごく高いのです。コロナ禍でリモートワークが始まってからはオンラインとのハイブリッドでのミーティングが当たり前の世の中になっていますが、仕事の時間をいかに効率化し質を落とさないよう保っていくか、そのぎりぎりのラインを攻めているように思います。「時間」というものは皆に平等に与えられているものだからこそ、そこには価値がつく。同じ時間で２倍も３倍も効率よく成果を出すことに、働く人としての価値が決まっていく。その人の時間を奪うだけの価値のある時間を提供できているのか。そういったことを常に考えながら皆が生活している様でした。

今回は特に文化の違いに関して、教育や仕事面にも絡めながら共有させていただきました。日本を外から見たからこそわかる良さや悪さを感じることができるのも、留学の醍醐味だと思います。感じたから満足なのか、と言われればそうではなく、こういった機会に文字におこし、皆と共有することでその視点が自分だけのものではなくなることを期待して、今回は締めさせていただければと思います。

次回は、少しフィラデルフィア小児病院のお話をお伝えできればと思います。

子どもの習い事

こころにお届けする本　こころの支援科 チャイルド・ライフ・スペシャリスト　矢口 暁子

手紙を受け取ったときの胸の高鳴り、みなさんはご経験がありますか？

「おかあさん、きょうは なんのひだか、しってるの？しーらないの、しらないの、しらなきゃ かいだん 三だんめ」

まみこはそう言って、歌ってスキップしながら学校へと行ってしまいました。

さあ、ここからお母さんの宝探しがはじまります。遊び心いっぱいに仕掛けられた手紙を追い、次はどこかしら…と挿絵をたどる楽しさは格別。まるで一緒に探しているみたい。

そして物語のハイライトは結婚記念日のお祝い。手紙に隠されたメッセージにはきっと驚かされることでしょう。

日々目にしている景色がいかに温かくて、大切な人と過ごす時間がどれほどかけがえのないものかを思い起こさせてくれる愛情あふれた作品です。たとえ今日が特別な日でなくても、大切なひとにこっそり手紙を忍ばせてみたくなりますよ。

「きょうはなんのひ？」
- 作：瀬田 貞二
- 絵：林 明子
- 出版社：福音館書店

サポーターズボード（寄附者ご芳名）

令和７年10月～令和７年12月にご寄附いただきました方々へ感謝の意を込めまして、ご芳名を掲載させていただきます。（希望されない方を除く）

あたたかいご支援、誠にありがとうございました。

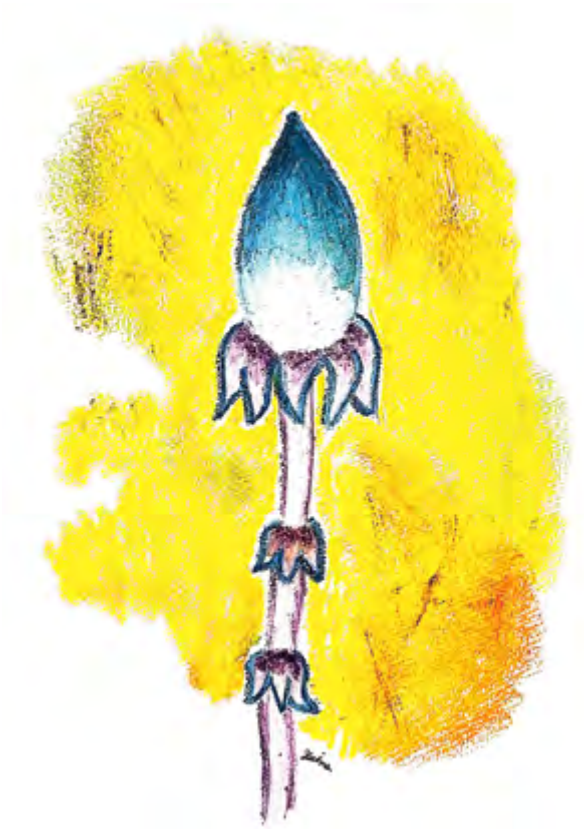
- ハッピーマルシェ信州実行委員会　様
- まつもと未来マルシェ　レモネードスタンドチーム　様
- 医療法人金木医院　金木内科クリニック理事長　金木　利通　様
- 株式会社角藤　様
- 株式会社マルモ機材　様
- 日穀製粉株式会社　様
- 株式会社エコネコル松本支社　様
- レゾナック労働組合塩尻支部　様
- 株式会社ハルピンフーズ　様
- 有限会社ケー・アイ・イーコンサルタント　代表　佐藤　吉朗　様
- 医療法人翠高会　理事長　高林　康樹　様
- 糸島　薫　様
- 伊藤　五月　様
- 伊藤　聡　様
- 丸田　典幸　様
- 村瀬　陽一　様
- 海沼　茂　様
- 太田　正雄　様
- 曽根原　永揮　様、高永　様
- 小林　勝也　様
- 和田　亮仁　様
- 今村　理恵　様
- 高橋　明　様
- 増田　景一　様

（順不同）

View

～イラスト ＆ 解説 by 浦野 結衣菜～

　みなさんこんにちは、病棟保育士の浦野結衣菜です。
　2026年になりましたね。まだまだ寒い日が続く安曇野ですが、きっと植物たちはこれから迎える春に向けて土の中やつぼみの中で準備をしていることでしょう。
　こどもたち、家族、応援する人みんなに素敵な芽吹きが訪れますように…
　今はじっくりじっくり準備の時間。



タイトル：「あお」　画材：オイルパステル

編集後記

　第100号という節目を経てお届けする第101号では、長野県立こども病院の日々の取り組みや、支えてくださる多くの方々の思いをご紹介しています。本号では、日本病院機能評価機構による受審のご報告をはじめ、長年看護の現場を支えてこられた福島副看護部長、山﨑紀江さんへのインタビューを掲載しました。お二人のお話からは、「子どもと家族に寄り添う医療」の大切さが改めて伝わってきます。
　また、付き添い入院のご家族を支えるランチテラスの活動や、子どもたちに笑顔を届けてくれるセラピー犬の訪問、地域の皆さまから寄せられる温かな応援など、病院を支えるさまざまな取り組みもご紹介しています。
　「しろくまニュースレター」が、子どもたちの笑顔と病院の日常をお伝えする小さな窓となれば幸いです。これからも長野県立こども病院は、子どもたちとご家族の「日常」を支える医療を大切にしながら、地域とともに歩んでまいります。

編集委員長　高見澤 滋

長野県立こども病院　外来医師担当表

2026年3月1日現在

	外来名		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
南棟外来	整形外科	午前	酒井　典子		松原　光宏 酒井　典子	松原　光宏	松原　光宏 酒井　典子(リハ装具)
		午後	酒井　典子	高橋　　淳(第2) 大場　悠己(第3)	松原　光宏 酒井　典子	酒井　典子(リハ装具)	
	小児外科	午前	スタッフ	好沢　　克 笠井　智子		好沢　　克	
		午後		高見澤　滋 ヘルニア外来	高見澤　滋	好沢　　克	笠井　智子
	眼　科	午前	北澤　憲孝 視能訓練	視能訓練	視能訓練	北澤　憲孝 視能訓練	北澤　憲孝 視能訓練
		午後	北澤　憲孝 視能訓練	視能訓練	視能訓練	北澤　憲孝 視能訓練	北澤　憲孝
	総合小児科	午前	南　　希成 村井　健美	樋口　　司		藤井　克則(第1・3) 村井　健美	樋口　　司
		午後	頭痛外来(第1・3) 南　　希成 (PM4時～5時予防接種相談)※2	樋口　　司	樋口　　司(第2・3) 南　　希成(ワクチン接種) 村井　健美(ワクチン接種)	樋口　　司(第1・2) 南　　希成 (PM4時～5時予防接種相談)※2	
	アレルギー科	午前	伊藤　靖典				伊藤　靖典 徳永　　舞
		午後	伊藤　靖典 徳永　　舞	伊藤　靖典			徳永　　舞
	血液腫瘍科	午前			丸山　悠太(第4)(膠原病・免疫不全)		
		午後	師川　紘一(自己血)		坂下　一夫(第1)(移行医療支援)		
	循環器小児科 (内科・外科)	午前	小沼　武司(外科) 小嶋　　愛(外科)	武井　黄太(内科) 大日方春香(内科)	小沼　武司(外科) 小嶋　　愛(外科)	赤澤　陽平(内科) 沼田　隆佑(内科) 澁谷　悠馬(内科)(第1・2・3・4)	赤澤　陽平(内科)
		午後	瀧聞　浄宏(内科)	赤澤　陽平(内科) 沼田　隆佑(内科) 米原　恒介(内科)	瀧聞　浄宏(内科)	武井　黄太(内科)(第1・2・4) 澁谷　悠馬(内科)(第1・2・3・4) 大日方春香(内科)(第2・3) 米原　恒介(内科)(第1・4)	武井　黄太(内科) 米原　恒介(内科) 澁谷　悠馬(内科)
	循環器小児科 成人先天心外来・移行医療支援	午前		大熊ゆか里(第2・4)(成人先天心外来)			
		午後					瀧聞　浄宏(第1・2)(移行医療支援)
	放射線科	午前			小岩井慶一郎		
		午後					
	リハビリテーション科	午前					リハビリ装具※3
		午後					
	神経小児科	午前			稲葉　雄二(第4)		
		午後					
	皮膚科	午前				御子柴飛鳥(第2・4)	
		午後					
北棟外来	脳神経外科	午前	宮入　洋祐 千葉　晃裕	宮入　洋祐 千葉　晃裕		重田　裕明	
		午後	宮入　洋祐 千葉　晃裕	宮入　洋祐		重田　裕明 宮入　洋祐	
	泌尿器科 皮膚・排泄ケア外来	午前	市野みどり 井川　靖彦		市野みどり 鈴木　智敬	市野みどり 鈴木　智敬	
		午後	市野みどり		市野みどり		
	神経小児科	午前	本林　光雄	大澤　由寛	西岡　　誠 青柳　　塁	大澤　由寛(第1・3) 福山　哲広(第2・4) 西岡　　誠 坂口　友理	大多尾早紀 本林　光雄
		午後	本林　光雄 青柳　　塁	本林　光雄 大澤　由寛 西岡　　誠	大澤　由寛 大多尾早紀	青柳　　塁 坂口　友理	大多尾早紀 本林　光雄
	小児外科	午前					高見澤　滋(胃瘻・中心静脈栄養外来)
		午後					高見澤　滋(胃瘻・中心静脈栄養外来)
	新生児科	午前	小田　　新	柳沢　俊光(奇数週)	小川　　亮	廣間　武彦	亀井　良哉
		午後	小田　　新	杉本　美紀(偶数週)	小川　　亮	廣間　武彦	亀井　良哉
	形成外科	午前	野口　昌彦 土屋　　彩 秋元　柾人	一之瀬優子	野口　昌彦 土屋　　彩 秋元　柾人	一之瀬優子	永井　史緒
		午後	野口　昌彦 土屋　　彩		野口　昌彦	野口　昌彦	野口　昌彦 杠　　俊介 土屋　　彩 永井　史緒
	内分泌代謝科	午前		長崎　啓祐	中村千鶴子(第2)	竹内　浩一(第3) 長崎　啓祐(第1・2・4)	中村千鶴子
		午後		長崎　啓祐 中村千鶴子	中村千鶴子(第3) 竹内　浩一(第1・2・4)	竹内　浩一(第3) 長崎　啓祐(第1・2・3・4) 中村千鶴子(第1・2・4)	
	総合小児科	午前		大森　教雄(第1)(腎臓)	中山　佳子(第3)(消化器)		
		午後		藤井　克則 大森　教雄(第1)(腎臓)			
	麻酔科	午前	スタッフ				
		午後					
	遺伝科	午前		武田　良淳	武田　良淳	武田　良淳	武田　良淳
		午後	古庄　知己(第3) 武田　良淳(第1・2・4・5)	武田　良淳	武田　良淳	武田　良淳(第1・2・4) 高野　亨子(第3)	武田　良淳
	耳鼻咽喉科	午前	佐藤梨里子	佐藤梨里子	佐藤梨里子	佐藤梨里子	佐藤梨里子
		午後	佐藤梨里子	佐藤梨里子	佐藤梨里子	佐藤梨里子	佐藤梨里子
	循環器小児科 胎児心臓外来	午前		米原　恒介		武井　黄太	澁谷　悠馬
		午後		大日方春香		赤澤　陽平	沼田　隆佑
	産科／成育女性外来	午前	スタッフ 助産師外来	スタッフ	スタッフ	スタッフ 助産師外来	スタッフ
		午後	スタッフ 助産師外来	スタッフ	スタッフ いちご外来	スタッフ 助産師外来	スタッフ
	母性内科	午前					
		午後	長崎　啓祐 中村千鶴子				
	血液腫瘍科	午前	坂下　一夫	坂下　一夫	坂下　一夫	坂下　一夫	
		午後	坂下　一夫			坂下　一夫	
	リハビリテーション科	午前	五味　優子	三澤　由佳	三澤　由佳(第2・4)	中嶋　英子 村田マサ子	五味　優子
		午後	三澤　由佳	三澤　由佳			三澤　由佳
	発達心療科※1	午前		山田　慎二(初診)		山田　慎二(初診)	山田　慎二
		午後					山田　慎二

※1　発達心療科については、紹介元医療機関から療育支援部にお問い合わせください。
※2　長野県予防接種センター相談　※3　リハビリ装具は整形外科酒井医師の診察となります。
★診察時間：午前9時～午後4時　★休診日：土・日曜日、祝祭日、年末年始

▶ 文字が小さく見にくい方はこちらから閲覧できます

予約専用電話　★受診には、原則として予約が必要です。
0263-73-5300